

幼小連携、幼保小連携を考える

―なめらかな接続を意識した取り組み―

酒井 朗

幼稚園・保育園から小学校へ

この原稿を書いている三月は卒園式のシーズンである。共働きのわが家の一人娘はこの春、保育園を卒園し、地元の公立小学校に入学する。ランドセルも机も買ってもらい、小学校に行くのを心待ちにしている。「早く勉強がしたい」というのが最近の口癖で、このまま幾つになっても学ぶことが好きだと言ってくれる

といいな、と親ながらに思う。その一方で、保育園とは生活時間も活動内容も大きく異なる小学校に、この子はうまく適応できるだろうか、これまで遊んでばかりだったのに、急に席にすわって先生の方を向いてじっとしてられるだろうか。食べるのがゆっくりで、保育園では給食を最後まで食べていることもあるのに、小学校の二十分給食の時間で食べられるだろうか、案ずることもある。

ところで、一方で私は、勤め先のお茶の水女子大学で「子ども発達教育研究センター」という組織に所属している。同センターは子ども発達支援を目的に、お茶の水女子大学が研究や研修面で外部社会に貢献する目的で平成十四年四月に配置され、この四月に文部科学省に正式に認可される。そのセンターが現在、同じキャンパス内にある附属学校園と共同で取り組んでいるプロジェクトの一つが、「幼小連携」である。

「幼小連携」とは幼稚園と小学校がより密接な連携を図っていくというもので、お茶の水女子大学附属小学校は、平成十三年度から文部科学省の研究開発学校に指定され、附属幼稚園とともにこの課題に取り組んできた。センター設置と同時にその業務に携わることになった私は、附属の先生方のお手伝いをしながら、「連携」という言葉で表現される取り組みの、何が重要な課題か、「連携」を通じて何をなすべきかを考えている。わが子が今まさに経験しようとしていること

が、そのまま仕事の一部となっているわけである。ただ、親としての私にとっては、「保小連携」の方がやり気かりではある。この小論では、今仕事として取り組んでいる幼小連携の実践から学んだことを紹介した上で、「保」も入れた幼保小の連携の可能性についても考えてみたい。

「連携」とは何か？

それにしても『幼児の教育』という雑誌の原稿を書いているのに、恥ずかしいことに、これまで私は幼児教育にはあまり縁がなかった。幼児教育とのつきあいは、もっぱら親の立場でのつきあいのみであった。研究や仕事の一環として、学校で授業を見せてもらったり、放課後の生徒の様子を見たり、先生や生徒に話を



何うことはこれまでも何回もある。だが、その場合も最年少は小学校一年であった。そのような私が、今回のプロジェクトを通じて、幼稚園に足繁く通い、幼稚園と小学校の先生から同時に話を聞く機会を得て、本当にいろいろなことを学ばせてもらったと思っている。

一つは「連携」ということの意味である。様々な地域でなされている幼小連携の実践を調べてみると、多くの学校が連携の名の下に取り組んでいるのは交流活動である。つまり幼稚園に小学校の子ども達が出かけていたり、小学校の行事に幼稚園児が呼ばれたりする活動である。

たしかにそれも連携の一つの形だろうとは思いつ、その効果や意義もよく分かる。だが、もともと幼小を連携せよということが世間で言われるようになったのは、「最近の新入学児にいろいろ問題が多い」と感じている小学校教諭の声、あるいは「小学校でうまくやっっていけるかな」という保護者や幼稚園教諭の心配

を反映してのことではなかっただろうか。

手元にある資料を見渡すと、「連携」の取り組みの多くは、そうした心配や声とは違うところにあるように思える。しかし、重要なのは幼稚園から小学校への接続をどう工夫すれば、子ども達が安心して、はつらつと小学校に通えるようになるかではないか。「連携」という曖昧な概念で括られる中で、どこにターゲットを絞って実践と研究を進めていくのかが、この研究ではきわめて重要だと思えるのである。

教育課程を接続させる

わが大学の附属幼・小では、こうした意識がある程度共有されて、現在、年長組から小一への接続の時期（接続期）をいかにして「なめらかに」するかについて検討している。だが、このことを附属幼稚園と附属小学校の先生方と話していく中で、私はもう一つのことに気づかされた。

それは幼稚園の先生と小学校の先生では「教育課程」という言葉に込める意味合いが違うことである。

幼稚園の先生にとつては、幼稚園の生活全体が「教育課程」である。これに対して、小学校の先生が「教育課程」と言うと、もっぱら教科の区切りになる。

なめらかな接続ということを話しあうと、往々にして「一貫した教育課程を作りましょう」という話になる。だが、それぞれが用いる教育課程の概念が違うので、一貫させることはかなり難しい。絵に描いた餅のような、実践的に意味のないものになってしまわないような工夫が必要である。

他の実践校でも似たような問題を抱えているようで、教育課程を上げましようとなると、どこでもハタと困るようだ。その際、実践的な解決策の一つは、幼稚園の活動と小学一年生の「せいかつ」科目の内容をどう繋げるのかという話を持っていく方法である。しかし、個人的にはそれは少し違うように思う。教科と

しての「せいかつ」に繋げるのではなくて、まず「教育課程」の概念範囲を合わせて、それを接続させるのが筋ではないだろうか。そうでなければ、サイズの違うパイプの口を無理に繋げているようなものだ。いざパイプに水を通そうとしても、繋ぎ目から水が漏れ出してしまふ。

水が漏れ出さないようにする方法、つまり「教育課程」を本来の意味で接続させる方法は二つあるだろう。一つは小学校の教育課程に合わせて、幼稚園の身を領域別に分けたうえで両者を繋げるといふ方法である。細い方のパイプに合わせて、太いパイプを細くするといふやり方だ。この場合、幼稚園の教育課程のある部分は、接続の検討からはずれてしまふ。ただし幼稚園でもかすの学習をしたり、ことばの学習を意識的にしたりして、学校的になつていれば、こうした形での接続は比較的容易だろう。

もう一つのやり方は、幼稚園の教育課程に合わせて

て、小学校の教育課程の概念を拡大させる方法である。細いパイプを広げて、太いパイプに繋げるわけである。具体的に言えば、小学校のすべての生活（教科の「せいかつ」ではない）を「教育課程」の範疇に含め、その上で幼稚園との接続を考える。幼稚園の生活（「教育課程」を小学校の「せいかつ」と繋げるのではなく、小学校の生活（「拡大した意味での教育課程」と繋げるのである。

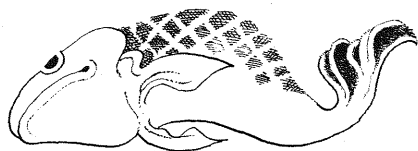
カリキュラムという概念

現場で教えているわけではない私には、どちらが好ましいか判断に迷う部分もある。しかし教育学を学ぶ身としては、私は後者を進めてみたい。前者のやり方では、結果的に幼稚園の教育はやせ細っていくように思えるからである。小学校に上がるための準備教育の意味合いが強くなり、幼児期に経験すべきこと、広義の意味で学んでおくべきことが、十分には達成されな

のではないかと思うのである。

もう一つの理由は、教育課程をめぐる前記の議論は、カリキュラムに関する世界的な論議全体の中で検討されるべきだと考えるからである。「教育課程」という言葉は「カリキュラム」の訳語として理解されている。しかし、教育課程というどうしても、学習指導要領で定められた内容という意味

合いが強くなりがちである。指導要領に則らない場合でも、予め定められた範囲内のこととして理解されがちである。だが、カリキュラムという概念は本来もっと広い意味である上、今まで以上に広く捉えるべきという声もある。現在、一番広義の意味でのカリキュラムとは、「学習者の学びの履歴の総体」「学習者が学んできたすべてのこと」というものである。つまり、教



育を与える側から捉えるのではなく、学習者の側から学習経験の総体をとらえるということだ。その考え方に基づけば、幼小連携では「生活」全てを捉える方がより現代的だろう。

しかし、最も広義のカリキュラム概念からすれば、その捉えすら狭いかもしれない。学習者が学んできた全てがカリキュラムであり、それを幼と小で繋げるのだとすれば、幼稚園児が小学校入学までに学んできた全てのことを、小学校で子どもたちが学ぶであろう全てのことと接続させる必要がある。それが真の意味での「生活」すべてを接続させることなのだろう。こうした取り組みが可能かどうかは分からない。ただし親の視点から見れば、接続の課題とは、たとえば「給食が時間内に食べられるか」といった問題である。それは就学前の生活の中での子どもの様子と小学生としての生活との間を繋ぐことである。

幼・保・小の連携へ

最後に「保」を含めた、就学前教育全体と小学校との連携・接続を考えてみたい。保育園は幼稚園・小学校とは行政上の管轄が違うため、幼小連携の取り組みほどには幼・保・小の三者の連携・接続の取り組みは多くはない。しかし、最広義のカリキュラム概念の視点に立てば、施設の種類、管轄の違いに拘わらず、初等教育を受ける前の子ども全員の「学びの履歴」とその後の「学びの履歴」とを接続させることが重要だろう。

また、幼稚園の視点を採り入れることで教育課程の概念が広げられたように、保育園の視点を採り入れることで視点は一層広がるに違いない。児童虐待の問題を扱ったある会議の席上で、報告者が「保育園の先生は子どもの様子から児童虐待の痕跡を見いだすケースが多い」と話していた。保育園は子どもにとってまさ

に生活の場であり、保育士の先生は、乳児のおむつ替え、パジャマに着替えてのお昼寝など、子どもの様々な生活に直接関わる。また、幼稚園ではお弁当の場合が多いが、保育園ではたいてい給食を出す。子どもの食への係わりは、子どもの生活を知るきわめて重要な機会である。

また、首都圏の保育園には外国籍の子どもが数多く在籍している。そこはまさに多文化な小社会であり、とくに「食」の問題は職員にとっても、子ども達自身にも顕在的な課題として浮上している。こうした場もある保育園を含めた形で就学前教育と小学校との接続を考えることは、多様な子ども達の生活を踏まえて、個々の子ども達の発達・生育状況に即した教育の実施を可能にするだろう。

おわりに

別のところでも書いたことだが、日本の学校教育の

一つの特徴は、校種間の移行に多くの困難が伴うことである。幼から小への移行で多くの困難が生じているように、小から中への移行でも、いじめや不登校などの問題の増加が見られる。

日本では、どの組織に所属するかでアイデンティティが付与される傾向が強い。人々は組織を移動する度に新しいIDカードを持たされるが、これと同時にID（IIアンデンティティ）そのものにも書き換えを求められる。このことが子どもにも大きなストレスを与えているのではないか。考えてみれば、子ども・若者たち自身は加齢に伴って、学校段階を上がっていくだけなのである。それぞれの人の発達過程に即した学びの履歴が作れるような教育を提供するために、学校はどう変わるべきなのか。幼小連携、幼保小連携は、こうした問題にまで繋がっているのである。

（お茶の水女子大学）